

# 福島区歴史研究会 会報

## 第三号

2014.10

### 目次

松下幸之助翁生誕百二十年と	
創業の地碑建立十周年を記念して	末廣訂 1
〈戦争の記憶〉	
七十年前	福原佐一郎 4
メモ1 福島区の学童疎開	メモ2 疎開の経緯
学童疎開と学徒動員	矢野とも子 5
孟蘭盆会覚え書き   玉江橋の精霊流し	田野 登 8
「松瀬青々」ゆかりの地を巡る	末廣 訂 10
展示「池田遊子の世界」開催	末廣 訂 11
上半期の事業	12
上半期の活動記録	12



## 松下幸之助翁生誕百二十年と 創業の地碑建立十周年を記念して

事務局長 末廣 訂

今年平成二十六年は福島区と大変ゆかりの深い松下幸之助翁（明治二十七年十一月生まれ）の生誕百二十年の記念すべき年である。そして大開公園に創業の地記念碑建立から十年の年月が流れた。当時松下電器OBの一人として記念碑の建立にお手伝い出来、記念碑建立のいきさつやエピソードを歴史研究会三十周年記念誌に書いた（「松下幸之助創業の地記念碑、大開で除幕式典」）が、改めて当時を振り返ってみたいと思う。

松下電器を定年退職した平成十三年の秋に福島区役所が主催する生涯学習講座で当会の前事務局長の井形正寿氏を講師として「大開と松下幸之助の跡地」を見学する会に参加した。創業の家や第一次、第二次本店工場等の説明があり、松下電器OBでありながら知らないことが多く、目から鱗が落ちた思いをした。

創業の大正時代の初め、大開地区は井路川や池を埋め立て、

新開地として開発が進み、家や工場が建ち、各方面から人が集まってきた、変化が激しい時代であった。

記念碑の除幕式に参列された幸之助翁長女の幸子さんが「このあたりはすっかり変わってしまったって、昔の面影がありません」と参列者を前に話しておられたのが印象に残っている。

大開公園に記念碑建立を機に、翁の足跡や跡地を訪ね、当時の大開地域を写真に収めて、かなりの量の資料になっている。また新聞社や放送局に協力してもらい取材活動もした。

毎日新聞では五回にわたりシリーズ「幸之助を語る、創業の地・大開で」と題し五名のゆかりのある方に取材し、同行した。

五人の方は「十一会の子孫」「松下家の植木屋」「翁の愛息を献身的に看病した医師の子孫」また「幸之助翁がよく買いに行ったタバコ屋の娘さん」等で直接お聞きして深い感銘を受けた。「十一会」は旅行などした大開に住む十一人の仲間である。

その中で幸之助翁が松下の本社を門真に移転して数年後、大開を訪問した時に、幸之助翁は「わしも二億円の借金ができたわ」と語ったという話があり、慌てて松下の株を売ったが、その後松下株が上昇。後で幸之助翁の言いたかったのは「大きな借金ができるほど会社が大きくなった」という事だとわかり皆が驚

いた等々エピソードが聞けた。

記念碑建立の場所が大開公園に決まるまでの苦労話がある。

大阪市は公的な場所で「公人」ではなく「私人」の記念碑は困る、ましてや民間の会社の記念碑は言わずもがなであった。幸之助翁は大開時代に区会議員に当選、その後の公職歴をみても公人の役割をされたことは明白である。また上福島公園にある「洋菓子ヒロタ」の記念碑やその他の事例を示したが結論が出なかった。そして思いついたのが大開小学校五十周年記念誌の末尾についていた幸之助翁の詩文「道」で、これを他の大阪市文学碑と同様の扱いとする提案を出し、やっと建立の許可が下りた。

碑は平成十六年十一月二十七日、翁の生誕百年の日に除幕式を行った。その後も大開公園を中心にして「ふじ祭り」や「ぜんざいパーティ」等地元の行事として続けられている。

記念碑の建立までに皆で何度も話し合った旧福島区役所地下の会議室が懐かしい。

表面に出ない立場で応援・支援をしてくれたのが当時の松下電器本社である。ほぼ当初から部長職二名が実行委員会のメンバーに入って終始難問を解決してくれた。また記念碑の寄付が

始まると本社から部課長職に声をかけ、五千名を超える現役の方から浄財をいただいたことを決して忘れてはならない。

今年は生誕百二十年をどのように表したらよいか福島区歴史研究会でいろいろ話をして、記念の講演会を開催する、と同時に福島図書館では地元大開の展示会を開くことに決定した（「吉野・新家・大開の今昔」一二月三〇日まで開催中）。

この記念講演会の講師が元松下電器社長の谷井昭雄氏に決まるのには偶然があった。

谷井氏は学校法人「関西大倉」の理事長をされており、当会の太田会長とは学校の理事会で時々同席するので「ダメモト」でお願いしたところ、快く引き受けていただいた。講演会では幸之助翁と直接の上司、部下としての裏話が聴けるものと楽しみである。

話によると谷井氏は個人的に学校と何の関係がなかったが、関西大倉の前身であった「関西商工」に幸之助翁が通ったことがあり、理事長を引受けられたと聞き、大変興味深い話だと思った。

十一月一五日の記念講演会では下福島中学校のブラスバンド演奏や講演後、大開幼稚園児の花束贈呈が予定されている。



創業の地碑  
(大開公園内)



「地番入大阪市図」(和楽路屋  
1933)より作成



# 七十年前

福原佐一郎

昭和十九年、一家三人で生活していた家を、家屋疎開に指定される破目になり、父と二人で、近所の人に助けられながら、長年住み馴れた二階建ての家屋を壊す作業を、約三日で更地に仕上げる事になった。幸いに同じ町会に、空き家が有り、以前と変わりなく生活することになった。

その年夏に、都会の国民学校児童にも国から田舎に疎開するように命令が下された。

大阪で三代暮らしの我が家には田舎がなく、縁故疎開もできず・・・大都市の国民学校には集団疎開の制度が出来、それに参加した。

福島区の国民学校は広島県にお世話になることになった。参加者は上級学童で四・五・六の三学年の生徒が対象だった。通学していた玉川国民学校は男女約三百人参加した。

私は六年生男子のクラス四十五人の友達と夏の終わりに現地に参加。お世話になった寮は広島県沼隈郡神村（現在は福山市）万福寺寮（万福寺本堂）で約半年間生活した。

国鉄山陽本線松永駅下車（福山と尾道の間）小高い丘の万福寺寮の生活は環境も大変良く、ただ食生活と衛生面が・・・。毎日片道約五キロほどの通学路（万福寺と神村国民

学校）を往復。日々授業は午前中で、大半は寮生活で、当時の生活と今の生活とは比較の対象にはならない。

当会の会報の創刊号掲載の鷺洲の橋昇氏の戦争の記録「学童疎開と空襲体験」に詳しく書かれている。本当に大変な生活だった。私達は二〇年三月に卒業予定の為、二月に帰阪した。

旧制中学校入試の準備をしていたが、三月一三日の大阪大空襲に市内大半が遭遇してしまい、入試が出来る状態でなく、願書を出している受験者は全員無試験で入学できて六年間学ぶことになり今日にいたる。

八十歳を過ぎた今、二度の疎開（家屋疎開と学童疎開）を経験した事は、つくづく大変な時代だったと思ひ起こす、今日この頃だ。



メモ1 福島区の学童疎開  
昭和20年5月16日調べ  
(福島区は広島県が疎開先)

上福島国民学校	279人	深安郡
福島国民学校	176人	沼隈郡
福玉川国民学校	363人	沼隈郡
野田国民学校	357人	沼隈郡
吉野国民学校	341人	芦品郡
新家国民学校	285人	深安郡
大開国民学校	262人	芦品郡
鷺洲国民学校	360人	芦品郡
海老江西国民学校	278人	御調郡
海老江東国民学校	169人	御調郡

(『大阪市学童集団疎開地一覧 上』  
大阪市史編纂所編 1995 より)

## メモ2 疎開の経緯

1943 「改正防空法」に「建築物ノ分散疎開」が入る（都市部に疎開空地が設けられていく）

1943.4.1 福島区新設

1943.12.22 「都市疎開実施要項」閣議決定、東京都区部、大阪などを疎開地区に指定、建物疎開（家屋疎開）は、戦後そのまま道路になった場合も多い（「疎開道路」）。

1944.6 「学童疎開促進要項」閣議決定

1944.9 福島区の児童の集団疎開始まる

## 学童疎開と学徒動員

### 矢野とも子

#### 一 学童疎開

広島に向かう子供達を見送りに、その家族は淀川の堤防に行き、鉄橋を渡って行く汽車に万感の思いをこめて、手を振って見送った。

食べ物のない子供達が来た。

田畑のものを取られるなどと言われながら、いつもひもじい淋しい思いをしていた。

未熟な南瓜をお風呂の火で焼いて食べたり、青いイチジクの実を食べ、口の中が炎症を起こして、とても痛かった

夜寝るとノミが布団のへりをゾロゾロ歩いたり飛んだり、シラミも、なかにはオネシヨする子も、顔にハタケを作ったり、

それでも命はあった。

戸の間から見ると、先生は、自分達が食べられないようなをがちそうになっている。

家族は大阪に来た時の先生の顔色を見て安心してた様子。

今では大分変わってきたと思うけど、地方で先生はとても尊敬されていたので、特に土地の人に大切にされていたと思う。

それでも大勢の子供と寝食を共にし、二十四時間過ごされたのだから、先生のご苦労は大変なものだったと思う。余談だが、今の教師だったら？と考えさせられる。

ところで、縁故疎開は待遇が良かったという話があるが、そうでもないようだ。福島区から奈良県の遠い親戚に一人預けられた友人からの話である。

食事のときはその家族とは別の場所で、違うもの（粗末なもの）を食べた。

学校へ行っても友達が出来ずに一人ぼっちで過ごした事など辛かったようだ。

以上は、私の友人からの聞き取りである。

#### 二 学徒動員

学校の教室で 航空兵用軍服のジャンパーのボタン付（絶対に取れないように付ける）。ベルトのバックル付け。（仕事中、

宝塚歌劇団の生徒の方が慰問朗読をして下さった)

**動員先** 大塚鉄工所 国鉄(現在のJR) 塚本駅下車

徒歩十五分位

**作業**

飛行機の部品 重い鋳物を「バイト」で削る十一工程、火花が散つてらせん状の金属が足の上に落ちる。熱い、靴の底に食い込む。運動靴はなかなか手に入らないので、仕事の時、逃げる時だけ、あとはワラジ(手に入りやすい)で、機械油は取れにくくて、別の油で洗うと取れるのを初めて知った。友人が指を落とした。(作業服・上下ードンゴロスのような目の粗い、ワタボコリのような、ネズミ色)

**食事**

(アルミのボールのような器) 豆粕(大豆から油をとった粕、家畜のエサだった)の入ったごはん、それでもお米が入っていたので軍需工場だから? でもうれしかった。

**昼休み**

職員のお兄さんが私達に英語の歌を教えてくださいました。「シヨウユアボート」「ツインクルリトルスター」等。

**往復**

大阪駅〜塚本駅の往復は大変で、今他の国のニュースで知っている方もあると思うが、丁度そのようなもので、車内の棚の上、車両の連結部分等、それは乗り降りが大変で、体力がなくなりそうだった。

**徒歩で**

そこで淀川大橋を渡り御幣島を通り、歩いていくことに。ワラジをはいて、缶に大豆の炒ったものを入れ、防空頭巾や傷薬等を持って……。途中、大勢乗っているトラックの荷台や、馬引きのおじさん方に荷車に乗せてもらったり……。あるとき国道を渡っている時、艦載機に機銃掃射をかけられ、橋の下まで走って逃げたこともあった。また、野里辺りまで道の両側が燃え、電柱も倒れていたので飛び越え、炎に直接触れないのに熱くてヒリヒリした。梅田の方が大きな、本当に大きな一つか二つの炎になっているのが見えた。

ある日、日本の飛行機が塚本近くに落ちてきた時、あれは敵機が標的にされないように日の丸を付けたもので、本当は敵機だった。それを見破ったとか(野田阪神に高射砲があった時だが・・・)。

他の動員先など

江崎グリコ 慰問用のグリコの包装、一粒ずつの包装(手作業)

爆撃された時、陸橋の下のどぶ川に漬かる。

近所の人達が空き缶を持って飴や砂糖の溶けたものをすくいに来る

芦森工業 落下傘の紐を作る。

学校へ戻る 軍服の洗濯（戦死した人の分？）。硬いブラシ

で、少し血の付いた所とか汚れた所を洗うと  
いうより擦る。芝生に広げて干す。

### 三 その他の記憶

○空襲のあと必ず黒い雨が降ってきた。

○夜、焼夷弾が落ちたとき、淀川の川面は、天神祭りのような  
“きれい” だけど恐ろしいものだった。

○爆弾が落ちるとき、ヒュー、焼夷弾のときはザー。

○飛行機が近づく国防空壕の中で、身体が硬直して何分か後にはもう命はないものと、真上に来ると助かったとほっとする。

○一度防空壕の中にいたとき、入口に立っていた班長が誰かに  
突き飛ばされたように中へ倒れこんできたと同時に、十四人位  
入っていた全員、座っていた畳ごと四十センチ位浮き上がった。

近くに爆弾が落ちたのだ。今でも忘れることができない。その  
日、家のガラス戸は皆割れてしまった。顔にガラスの破片がい  
っぱい突き刺された人もあり、手首から先が壁に押し付けたよ

うになった人もあり、その後どうなったのかわからない。

○被災証明を取りに行く道で、着物だけでモンペをはいていな  
い人が亡くなっていて、そのまま捨てかれていた（モンペをは  
いていないと非国民といわれ放置される）。死んだ馬の肉を、食  
べるために数人の人が切り取っていた。

○玉川町の高架（市電）の手前あたりは、道路に木製の煉瓦み  
たいなものを敷いて上にアスファルトをかけた道で、それを持  
ち去って燃料の代わりにしていたので、道はボコボコだった。

○阪急電車のシートが切り取とられている。下駄またはぞうり  
の「鼻緒」に丈夫だからとかで。

○阪神電車の地下から大阪駅へ向かう、現在の阪神百貨店沿い  
の通路は多くの人が横たわっていた。皆人間の厚みがなく、頭  
と足先だけで、あとはペチャンコの状態だった。行く時は生き  
ていたのに、帰る時は死んでいた人もいた。餓死？

○夏の暑い時に大阪駅の前で焚き火をして温まっている。栄養  
が足りないので体温が低いのかも知れない。

○阪急百貨店で・代用うどん（海藻から作ったのか、形だけう  
どんでコンブのような色）・せんべい（イナゴを粉末にして海老  
せんのように）が販売されていた。

○空襲で亡くなった人は小学校の講堂に並べられ、その中には  
小さな女の子が人形を抱いて。赤ん坊を背負って用水桶（コン  
クリート）に漬かって、等、今でも忘れることができない。

孟蘭盆會覚え書き ― 玉江橋の精霊流し ―

田野 登

：阪大病院前の玉江橋は八月十五日の宵には精霊を送る橋となる。餓鬼がきさんにもヒモジイ（空腹な）思いをさせないようにと、盆棚の果物などの、お供え物を船にした紙箱に載せて流した。紙箱の船に蠟燭ろうそくを立て、橋を降り、闇の中そーろつと川に浮かべた。いつも、「船」が見えなくなるまでに蠟燭の火は消えていた…。

これは私の昭和三十年頃の記憶の世界である。

浄土真宗の家庭では行わないかも知れないが、孟蘭盆の間、先祖の戒名を経木に書いて盆棚に祭る。神仏諸霊の祭りは、迎えることから始まり、送ることで終わる。その間、機嫌よくおられるようにとささやかなお祭りをする。お祭りとは奉祀ほうしすることである。まず、お供えをすることである。西瓜すいかや生野菜、果物、ビスケットなどの菓子をお供えをする。何よりも三度三度のお膳と十時と三時のおやつを欠かさない。供え物は野菜の

煮付け、味噌汁、ご飯が必須で先祖様の中に酒の好きな方が居られれば酒を供え、茄子なすびの浅漬けの好きな方が居られれば、そのようにする。まるで亡き人がいますがごとく接待するのである。おやつにはわらび餅だとか素麺そうめんを供える。お勤めは朝夕の二回である。わが家の宗旨では般若心経はんにゃしんきょう、修証義しゅうしょうぎ、舍利礼文しやうらいもん三遍をあげる。先祖のお祭りとは、孟蘭盆に限らず、香華こうげを手向け、お供えをして読経することである。

あと一つ、孟蘭盆会には先祖を祭るほか、施餓鬼せがきといって祭られぬ諸霊おんじきに飲食を施したりもする。盆棚とは別に餓鬼棚を設けている家庭もある。わが家ではご住職の棚経が毎年、十五日の正午頃である。その日のお経は施餓鬼供養にあてられる。たくさんの仏名ぼんごを梵語で唱えられる。ところで私は奇習とも思われる仕来りを伝承している。夜更け、四つ辻に立って、三度のお膳に供えたお茶湯を貯めたのを撒くのである。「餓鬼に施す。餓鬼に施す」と唱えながらお茶湯ちやとうを撒く。亡き母は、それはお盆に祭られない餓鬼さんが四つ辻にウジャウジャして喉を渴かして待っているの、「餓鬼に施す。餓鬼に施す…。」と唱えるのやと言っていた。ああ、お盆は祭られぬ諸霊に飲食を施す、施餓鬼の時なんやと思いきこしたりもしている。



今年の場合、

夕方近くになつて、近所からお供えをいただいた。それでシラムシと送り団子



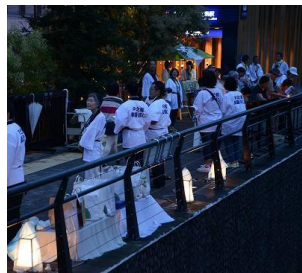
8月15日夕の祭壇

を供える場所がなくなりしかたなく経机に供えた。シラムシ(白蒸や、白玉の送り団子は、お土産に持って往いんでもらうために用意するものである。お供え物は足が早いからとか言つて、母はなぜか早く往んでもらいたがつていた。

夕方ともなれば、勤行おつとめの後、仏壇のリン(鈴)を鳴らし、門口でオガラ(苧麻)を焚たいて先祖さんの霊を送る。福島区の家庭では、堂島川、安治川、新淀川の水辺で精霊流しをしていた。

現在、玉江橋の精霊流しは、八月一五日の宵、北区中之島町会が世話方となつて行われ、近在の供え物を携えた老若男女で賑わっている。河川を汚染してはならないので供え物を流すこととはしないが、橋の南詰めともの遊歩道では蝋燭の火を点し川面に合掌している。

私の盂蘭盆の祭祀は「民俗の窮状」というべき有様だろう。もともと「真正」な民俗などでなく、母からの聞き書きをも違えてしまい、きつと、過去の「伝統」からも逸脱したものである。しかも成人した子どもたちが寄りつかない祭りなので、未来のための現在の民俗でもなさそうである。私自身、唯一人黄泉こうせんに赴く道すがらの勤めなのだろう。盂蘭盆の時は、亡き父母、亡き祖父父母のいますがごとく過ごす時である。福島区に生まれ育った者の一人がこの地で行なっていることを、恥を忍んで、盂蘭盆会覚え書きとして、書きとどめた。



「中之島精霊流し」

(中之島精霊流し実行委員会主催)

(中央と下の写真は、  
実行委員会・相葉幸子氏  
撮影)

## 「松瀬青々」ゆかりの地を巡る

事務局長 末廣 訂

七月二六日（土）、大阪俳句史研究会四八名がバス二台で、松瀬青々の第二の故郷海老江を訪問され、我が歴史研究会でゆかりの史跡等を案内した。

松瀬青々は正岡子規の弟子で、高浜虚子らと明治から昭和初期にかけて活躍した俳人である。明治二（一八六九）年、現在の三井住友銀行本店敷地内に生誕の碑（現在工事中）が建つ旧大川町で生まれた。当時の第一銀行勤務時代に俳句を学び「ホトトギス」に投句して、子規と知り合う。その後、大阪の朝日新聞に入社し、朝日俳諧を担当し、「宝船」を創刊した。

明治三九（一九〇六）年の暮れ、大川町から青々一家五人が井路川を船で海老江に引越し、大正一〇（一九二一）年までの十五年間、海老江東之町に居住した。

現在、八坂神社に青々自筆の句碑が、また南桂寺に弟子らが建てた「青々先生」の墓碑があり、それぞれに青々自筆の短冊や掛け軸が保存されている。

また自筆の扁額が掛っている朝日地蔵尊や旧宅跡等青々の足跡が残っており、最近では旧宅隣の外野酒店に青々の額が見つかった。

当日、これらの足跡を巡った後、八坂神社の社務所で句会の研究会が開かれ、田邊富子氏の「青々」にまつわる研究発表があり、末廣が青々の居住した時代の海老江の歴史を話した。

海老江に関する青々の俳句を挙げると、

枕もと海老江の寺の鐘氷る

草の露朝地車に幕かける

草の春田は年々に家となる

そして八坂神社境内に

菜の花のはじめや北に雪の山

いずれの句も当時の海老江の田園風景や生活の一端が詠まれており、昔が偲ばれる。

当日は青々の孫のご婦人も参加され、案内説明に力が入った。ご一行は、午後、終焉の地、高石市を訪問後、墓がある天王寺の正覚寺に向かわれた。

当日引率された朝妻先生から雑誌

『大阪春秋』の秋号に海老江訪問時の俳句が載ることになったと連絡があり、秋号が楽しみである。



## 展示「池田遊子の世界」開催

事務局長 末廣 訂

彫刻界の異才と呼ばれた造形美術家・池田遊子（一九〇九―二〇〇六）が室戸台風で倒れた海老江八坂神社のイチョウの木から六〇体の像を作成したのは八〇年前の昭和九（一九三四）年で、二五歳の時であった。神社のアルバムにそれらの像の写真と奉納した持ち主の名前が残されている。

作家遊子は申し込み者の希望する像を彫刻した。例えば親鸞、布袋、役行者とさまざまであったが、具体的に刻し、本人の号（当時は鵬旭）を入れている。希望者は会費月二円を一年掛け、神社復旧資金として四円、作家に二〇円を贈っている。

数年前からこの時に制作された彫刻を一堂に会して展示会をしたいという声があった。

また海老江に在住の池田遊子の甥（故東出和男氏）ひがしでが所蔵している作品を併せて展示してはという提案があった。

展示場所と時期を福島区役所と話して、八〇九月の二か月間一階ロビーのガラスケースを借りることができた。

八月の初め、会員が朝から展示の準備後、山本副区長や遊子

の子息・池田方彩氏（公財）天門美術館長、八坂神社の宮司らで簡単な開会式をロビーで行った。

二つのガラスケースのうち一つは「神社で倒れたイチョウの木から彫った五体の像」を中心とし、もう一つは「故東出氏の所蔵品二六体」を展示した。どちらも見応えのある作品である。

特に東出氏出品コーナーにある大きな木彫りの像は作品名を「呵々大笑」と云い、生前、東出氏が体の調子が悪い時、この像と対面していると不思議と笑いが込み上げてきて体調がよくなったという話を聞いたことがあり、懐かしく思い出される。東出氏の生前中に開催していればと残念である。



## 福島区歴史研究会 2014年上半期の事業

展示「福島区の史跡と文化財」(会場・福島区役所) 1/14～6/30



第12回セミナー「西鶴・芭蕉・近松の話」2/16 講師 大橋正叔氏

展示「上福島・福島・鷲洲の今昔」(会場・福島図書館) 3/11～6/29

\*「ベイコム地元ニュース」取材・放映 5/13～5/19

第13回セミナー「地域史研究のための地蔵信仰調査」6/8 講師 田野 登氏

\*\*\*\*\*

### 2014年 上半期の活動記録

- 1/8 展示準備(区役所)
- 1/16 役員会
- 2月 『福島区歴史研究会会報 第2号』発刊
- 2/15 総会・懇親会
- 2/20 企画会議
- 3/7 展示準備(図書館)
- 3/20 企画会議
- 4/17 企画会議
- 5/15 企画会議
- 6月 「なにわ大賞」応募 入選せず
- 6/19 企画会議

★浦江塾(協力) 2/1 3/1 4/5 5/3 6/7



ホームページ <http://o-fukushima.com/rekishi/top.htm>

(会報バックナンバーも掲載)

会報第2号掲載「下福島公園の今昔」の増補版『下福島公園の今昔』を岡倉光男氏が小冊子にまとめました。ご希望の方は同氏まで。

(印刷：谷口印刷紙業)